戊辰戦史解明に不可欠！
最高最大の維新史料集成

復古記

全十五巻

太政官編纂

東京大学史料編纂所蔵版
東京大学出版会刊行
発売元　マツノ書店

復古記

「復古記」は生涯の伴侶！

マツノ書店

「復古記」には新しい国家社会を目指すのみでなく、古き良き時代に戻るとの意が重く大きく含まれる。（本誌7頁）

文学博士辻善之助先生から『復古記』が出版されると聞かされたとき、「何という有難いことであろう」と心の底から感謝した。

十数年間明治維新の史料を追いかけ追いかけ研究を続けているが、濱の真砂にも等しく、数限りない史料が目の前に現れてくるのには自分ながら眩暈の感があるし、一々謄写するには莫大の資金を要する。これにはホトホト困却している際、あの多年の歳月と多数の人の手によって蒐められ整理された史料を、吾々如き貧しき学徒の机上に置き、自分のものとして読み通すことが出来るのかと、歓喜胸に充つる思いである。

自分は今こそ先輩の御陰で史料堆積の中にいるが、人生の境遇は予期しがたく、いつかは現職を去るときも来るであろう。そのときただ独り破れたる書斎の裡に晴耕雨読する折もあったならば、この『復古記』こそは己が研究にとって慰安を与えて呉れる唯一の書であるし、一日も手放すことの出来ぬ最高の伴侶であると思う。「これさえあれば」如何に力強く感ずるであろうかと、今から想像している。

『復古記』の内容は別紙の通りであるが、要するに幕末史の大詰であり、同時に明治史の起りという、まさに過渡期の史実を一々史料によって明らかにしたものである。過渡期において歴史を作る人々の努力が真剣味を極力帯び、時勢回転期の微妙な世相が遺憾なく現われている時代、また明治維新の大精神が真偽もなく力強く表現された時代である。かかる貴重な、史料集と大綱を明示した綱文とより成る浩瀚な書籍が出版せられることに、自分は感謝感激を禁ずる能わない。（維新史料編纂官　藤井甚太郎）

……ここに、東京帝国大学に蔵せられた一書がある。

それは「復古記」および「復古外記」三百六十余巻であって、元太政官修史局で前後十数年の星霜を費やして編纂されたものである。記載せられたる年代は短いが、最も大切な、最も興味ある時期の、最も証拠とすべき記録である。

すでに史料の散逸消失せるものも多く、元勲遺老の生存せるものも極めて寥々たる今日において維新の消息を窺わんとする者は、この『復古記』によるの外はあるまい。殊に征討の顛末を詳かにした「復古外記」に至っては、浄書だも未だ一回も出来上がらず、稿本のままただ一部東京帝国大学史料編纂掛に蔵せられているに過ぎない事を思えば、実に貴重なる文献といわねばならない。（臨時帝室編修官長・文学博士　三上参次）

本書初版パンフより抜粋

内容見本

復古記　巻一　慶應三年十月十四日

二

○十月

十四日、征夷大將軍正二位内大臣兼右近衛大將德川慶喜、上表シテ、政權ヲ奉還セント請フ。

臣慶喜謹テ　皇國時運之沿革ヲ考候ニ、昔　王綱紐ヲ解キ、相家權ヲ執リ、保平之亂、政權武門ニ移テヨリ、祖宗ニ至リ、更ニ　寵眷ヲ蒙リ、二百餘年、子孫相受、臣其職ヲ奉スト雖モ、政刑當ヲ失フコト不少、今日之形勢ニ至候モ、畢竟薄德之所致、不堪慙懼候、況ヤ當今外國之交際日ニ盛ナルニヨリ、愈　朝權一途ニ出不申候而者、綱紀難立候間、從來之舊習ヲ改メ、政權ヲ　朝廷ニ奉歸、廣ク天下ノ公議ヲ盡シ、　聖斷ヲ仰キ、同心協力、共ニ　皇國ヲ保護仕候得ハ、必ス海外萬國ト可並立候、臣慶喜國家ニ所盡、是ニ不過ト奉存候、乍去、猶見込之儀モ有之候得者、可申聞旨、諸候ヘ相達置候、依之、此段謹テ奏聞仕候、以上詢。

十月十四日　　慶喜

二條攝政記
德川慶喜實記

○十三日慶喜諸藩ニ示ス書

我　皇國時運ノ沿革ヲ觀ルニ、昔　王綱紐ヲ解キ、相家權ヲ執リ、保平ノ亂、政權武門ニ移テヨリ、我祖宗ニ至リ、更ニ　寵眷ヲ蒙リ、二百餘年、子孫相受、我其職ヲ奉スト雖モ、政刑當ヲ失フ不少、今日ノ形勢ニ至リ候モ、畢竟薄德ノ所致、不堪慙懼候、況ヤ、當今外國ノ交際日ニ盛ナルニヨリ、愈　朝權一途ニ不出候テハ、綱紀難立候間、從來之舊習ヲ改メ、政權ヲ　朝廷ニ歸シ、廣ク天下ノ公議ヲ盡シ、　聖斷ヲ仰キ、同心協力、共ニ　皇國ヲ保護セハ、必海外萬國ト可並立、我國家ニ所盡不過之候、乍去、猶見込之儀モ有之候者、聊忌諱ヲ不憚可申聞候。

德川慶喜實記
細川護久家記

○同日老中副書

今般上意之趣ハ、當今宇内之形勢ヲ御洞察被遊候處、外國交通之道盛ニ開ニ至リ、御政權二途ニ相分候而者、　皇國之御綱

■『復古記』はどの章も先ず大文字の「綱文」、そして史料名、史料と続きます。「綱文」は後に続く史料のまとめです。

内容見本

○是ヨリ先、德川慶喜ノ臣山岡高歩。鐵太郎大總督府ノ參謀西郷隆盛ニ就キテ、其主ノ爲ニ哀ヲ乞フ、勝義邦モ亦書ヲ隆盛ニ致シテ、其意ヲ陳ス、大總督、乃チ實効ノ目ヲ指示シテ、之ヲ遣ル、是日、義邦及ヒ高歩等、隆盛ノ營ニ抵リ、指示ノ目ニ就キテ、其情願ヲ陳請ス、隆盛、乃チ東海、東山二道ノ先鋒總督ニ牒シテ、假ニ明日ノ進軍ヲ止ム。

○勝安芳日記ニ云、三月五日、旗本山岡鐵太郎ニ逢フ、一見其爲人ニ感ス、同人申旨アリ、益滿生ヲ同伴シテ駿府ヘ行キ、參謀西郷氏ヘ談セムト云、我レ是ヲ良トシ、言上ヲ經テ其事ヲ執セシム、西郷氏ヘ一書ヲ寄ス。

無偏無黨王道蕩々矣、今　官軍逼鄙府トイヘトモ、君臣謹テ恭順之道ヲ守ルハ、我德川氏之士民トイヘトモ、皇國之一民成ルヲ以テノユヘナリ、且　皇國當今之形勢昔時ニ異ナリ、兄弟牆ニセメケトモ、其侮ヲ防クノ時成ルヲ知レハナリ、雖然鄙府四方八達、士民數萬來往シテ、不教之民我カ主ノ意ヲ解セス、或ハ此大變ニ乘シテ不羈ヲ計ルノ徒、鎭撫盡力餘力ヲ殘サストイヘトモ、終ニ其甲斐無ク、今日無事トイヘ共、明日之變誠ニ難計、小臣鎭撫力始ト盡キ、手ヲ下タスノ道無ク、空敗飛彈之下ニ憤死ヲ決スル而已、然トモ　後宮之尊位一朝此不測之變ニ到ラハ、頑民無賴之徒、何等之大變牆內ニ可發哉、日夜焦慮ス、恭順之道從是破ルトイヘトモ、如何セム其統御之道無キヲ、唯軍門參謀諸君能ク其情實ヲ詳ニシ、其條理ヲ正サレンコトヲ、且百年之公評ヲ以テ泉下ニ期スニアル而已、嗚呼痛哉、上下道隔ル、　皇國之存亡ヲ以テ心トスル者ナク、小臣悲歎シテ訴ヘサルヲ不得ル所ナリ、　其御所置ノ如キハ敢テ陳スル所ニアラス、正ナラハ　皇國之大幸、一點不正之御擧アラハ　皇國之瓦解、亂臣賊子之名目千載之下消スル所ナカラム歟、小臣推參シテ其情實ヲ哀訴セントスレ共、士民沸騰鼎ノ如ク、半日モ去ル能ハス、唯愁苦シテ鎭撫ヲ事トス、將タシテ其勞スルモ亦功ナキヲ知ル、然トモ其志不達ハ天也、到于此際何ソ疑ヲ存セン哉、誠恐謹言。

三月六日　　勝安房

内容見本

十七日、詔シテ江戸ヲ以テ東京ト爲シ、鎭臺及ヒ關八州鎭將ヲ廢シテ、更ニ鎭將府ヲ置キ、駿河以東十三國ヲ管理ス、輔相三條實美ヲ以テ鎭將ヲ兼シメ、大總督ハ專ラ軍務ヲ掌ル、又、江戸府ヲ改メテ東京府ト稱シ、烏丸光德ヲ知事ト爲ス。

○詔書

朕今萬機ヲ親裁シ、億兆ヲ綏撫ス、江戸ハ東國第一之大鎭、四方輻輳之地、宜シク親臨以テ其政ヲ視ルヘシ、因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン、是朕ノ海內一家、東西同視スル所以ナリ、衆庶此意ヲ體セヨ。

辰七月　官中日誌　嵯峨實愛家記

○副書

慶長年間幕府ヲ江戸ニ開キシヨリ、府下日々繁榮ニ赴候ハ、全ク天下之勢斯ニ歸シ、貨財隨テ聚リ候事ニ候、然ルニ、今度幕府ヲ被廢候ニ付テハ、府下億萬之人口、頓ニ活計ニ苦候者モ可有之哉ト、不便ニ被　思食候處、近來世界各國通信之時態ニ相成候テハ、專ラ全國之力ヲ平均シ、　皇國御保護之目途不被爲立候テハ不相叶事ニ付、屢東西　御巡幸、萬民之疾苦ヲモ被爲問度深キ　叡慮ヲ以テ、　御詔文之旨被　仰出候、孰レモ篤ト御趣意ヲ奉戴、徒ニ奢靡之風習ニ慣レ、再ヒ前日之繁榮ニ立戻リ候ヲ希望シ、一家一身之覺悟不致候テハ、遂ニ活計ヲ失ヒ候事ニ付、向後銘々相當之職業ヲ營ミ、諸品精巧、物產盛ニ成行キ、自然永久ノ繁榮ヲ不失樣、格段之心懸可爲肝要事。

七月

○職制

東京在勤、

一鎭將

右東國事務ヲ總裁ス、

内容見本

復古外記 稿本

白河口戰記 第七

自明治元年八月二十四日
至同 晦日

八月二十四日、總督、白河ニ抵ル。

總督府正親町殿、明廿四日當驛白河ヲ指ス、ヘ御著ニ付、各藩一人ツヽ、江戸口先御迎罷出、御著座之上爲伺御機嫌參營可被成候、以上。

八月廿三日

忍藩 山田求馬

大久保忠順家記

○陣中日誌ニ云、八月廿四日、蘆野驛御出馬、卯刻過白川驛御著、未刻過御泊。

○官軍、若松城ヲ攻ム、城堅シテ拔ケス、乃チ火ヲ外郭ニ放チ、退テ其東北天寧寺、三日町、六日町、甲賀町、馬場町、大町、桂林寺、越後、米澤等諸口ヲ扼シ、長圍ヲ築キ、以テ諸路ノ官軍ノ到ルヲ俟ツ、是日、勢至堂口ノ賊、退テ天寧寺口ニ至リ、城中ニ入ラントス、官軍之ヲ邀ヘ擊ツ、賊轉シテ天神口城ノ東南隅ニ在リ、ニ赴キ、遂ニ城中ニ入ル。

○鎭將府日誌、八月廿七日、伊地知正治ヨリ大久保利通ニ贈ル書柬節略ニ云、廿日二本松出立、廿一日、ボナイ峠口ヨリ左右中三手ニ分レテ、會津口ヘ攻掛リ候處、其日中三ケ所之砲臺ヲ破リ、會津領ヘ一里餘進入、廿二日猪苗代攻取、其夜四番

内容見本

隊其外ニテ戸ノ口、十六橋ト云要地押渡リ、廿三日會津ヘ攻入、廿四日迄賊徒必死防戰候故、城下不殘燒拂云々。

○慶應出軍戰狀ニ云、八月二十四日、大手口ヘ出テ攻擊ス、城堅固ニシテ防禦嚴整ナリ、味方之諸隊晝夜之連戰ユヘ、一先ツ圍ヲ引テ、武士小路ヲ燒拂ヒ、遠攻スルニ如クハ無シトテ、軍議決セリ、就テ火ヲ放テ諸屋敷ヲ燒キ、兵ヲ揚テ大手口、天寧寺口、三日町口、六日町口ヲ堅ム、晝夜ヲ不別互ニ砲發、五番隊、外郭藩士之宅不殘燒拂、三日町口之郭門ヘ出候處、賊天寧寺口ヨリ、後之方ヘ廻リ候付、直ニ同所ヘ相進候處、賊小銃並鎗ヲ以進來候付、悉追散シ、同所ハ勿論、各藩共ニ外郭之諸門ヲ固ム、三番隊天寧寺門ヲ守ル、時ニ勢至堂口ヲ守ルノ賊、右門ヘ掛リ、城中ヘ歸ルノ機ヲ察シ、預メ伏ヲ設ケ置、機合ニ乘シ討擊、追テ近村ニ至リ、又本ノ持場ヘ歸ル。

○戊巳征戰紀略ニ云、八月廿四日、郭內ノ人家ヲ放火シ、郭門ヲ固メ、壁壘ヲ築ク。

○山內豐範家記ニ云、八月廿四日、城中城外砲戰不止、官兵不足セルヲ以テ合圍スル能ハス、徒ニ城ノ二面ヲ固メ、互ニ相睨ス、當是時ニ、猪苗代留守ノ薩兵並ニ我三小隊ハ、頻ニ進軍ヲ請フ、谷之カ爲メ若松ニ赴ク、若松モ亦兵ノ不足ヲ憂ヒ、猪苗代ノ守兵ヲ進ムルヲ令ス、故ニ本日盡ク若松ニ著ス、原註、日ヲ以テ達セリ、只十六小隊、翌乃病院ヲ瀧澤山ニ移ス、兩參謀相議曰ク、城堅固ニシテ賊死守ス、我兵少ニシテ攻城ノ器備ハラス、無謀城ヲ攻ルハ、徒ニ兵ヲ損スル而已、不如、一旦外郭內ノ士第ヲ放火シ、賊ノ依テ隱蔽スル處ナカラ令メ、官兵退テ外郭ノ壘壁ニ依リ、守之兵ヲ市街ニ屯セハ、賊ノ進擊便ナラスシテ、我亦依テ以テ守ルヘキアリ、遂ニ兵ヲ市中ニ移シ、各藩分レテ盡ク外郭內ノ士第ヲ放火シ、存スル處市街而已、於是各信地ヲ定メ、市街ヲ衞ル、薩兵及佐土原兵ハ、追手通外郭門ヨリ天寧寺口南東ニ至ル迄守之、我兵ソノ右大町、馬場町ノ兩門並ニ町ノ北方兩道ヲ守ル、長州、大垣ハ我兵ノ持口ノ西ヨリ越後、米澤、兩道ヲ守ル。原註、大村兵ノ守口ヲ失セリ、大村兵、伊地知參謀ノ命ヲ奉シ、再ヒ猪苗代ヲ守レリ、本日ノ事ニヤ、今審カナラス、

○大垣藩記ニ云、八月廿四日早天ヨリ、又々猛烈攻立候得共、城中更ニ弱ル氣色モ無之、依テ衆軍會議致シ、三ノ郭內放火致シ、官軍不殘町家ヘ引揚、其四方ヲ嚴重ニ相固ム、

又云、八月廿三日ヨリ連日連夜ノ合戰ニテ、大小砲之音ハ山岳ニ響テ、恰モ雷鳴ノ如ク、城市ノ燃ル火ハ半天ヲ燋スカ如ク、

内容見本

ヨリ、町々在々放火シテ、闇夜モ如白晝、三十日之間、焔煙天ヲコカシ、砲聲雷ノ如シ、死傷、敵味方幾千人トイフヲシラス、藩士ノ妻子、雲髻ヲ剔リ、白布額ヲ縛シ、薙刀ヲ提ケ、進擊シテ討死スル者アリ、亦ハ手負ノ者ヲ扶ケテ、兵粮ヲ炊キ、彈藥ヲ製シ、男子モ及ハサル所アリ、最モ英雄ト稱スルハ、藩士某ノ妻也、良人石ニ戰死セリ、敵、城下ニ薄ルヲ聞テ、老母ニ自裁ヲ進メ、自ラ其子ヲ刄シ、髮ヲ剔リ、薙刀ヲ提ケテ城ニ入リ、慷慨凄惋、敵陣ニ突入シ、丈夫ト雖モ實ニ不及動勢也、此時哉、城中兵粮ニ乏シク、玄米ヲ炊キ、是ヲムスビトシ、生味噌少シヲ以テ、水ヲ喰ミ、或ハ唄ヒ、或ハ笛ヲ吹、鼓ヲ打、以テ兵勢ヲ助ク、敵ハ益々十重二十重ニ圍ヒ、依テ、米澤侯ヘ援兵ヲ賴ム、使節兩度、唯出張ノ風評ノミ、敵ハ日々、五重ノ天守ヲ目的トシテ、四方ヨリ大砲烈敷打立、最、小田山ヨリハ太砲七八門ヲ備ヘ、連發シ、加フルニ、燒玉ヲ以テス、率ニ蜂ノ巢ノ如ク、殿宇、柱碎ケ梁折レ、瓦飄リ壁飛フ、雖然リト、節義ノ士守ル故カ、疊々重々トシテ芙蓉ノ雲ニ聳ヒユルカ如シ、重圍ノ敵兵五萬餘、我兵ワツカ五千、衆寡不敵スト雖モ、我レ死守スルヲ以テ、敵、徒ニ重圍スルノミ、宰相公世子、度々城中巡覽シ、諸兵ノ勉强ヲ賞シ、之ニ賜ルニ干魚、白餅ヲ以テシ、寒暖衣食ヲ共ニス、諸兵士ニ至ルマテ、晝夜草鞋ヲトカス、大砲、小銃一時モヤマス、其轟ク事、百萬ノ雷電、一時ニ頭上ニ落ルカ如シ、城外ヲ望見スレハ、屍ハ道路ニ横ハリ、血ハ城溝ヲ染メ、子失フモノモアリ、親ヲ哭スル者モアリ、實ニ兵ハ國ノ大事、死生存亡ノ道、察セスンハ不可有。

十五日、督府、若松城危急、日ニ迫ルヲ以テ、白河ノ諸軍ヲ警戒シテ、賊兵ノ突出ニ備ヘシム、又、鹽川ノ賊、猪苗代ニ出ルノ虞アルヲ以テ、大村藩兵ノ若松ニ在ル者ヲ遣シテ、之ヲ守ラシム。

若松攻城切迫ニ付テハ、却テ意外ニ出、當方襲來モ難計、彌兵備ヲ嚴シ、殊ニ風烈之夜、巡邏不急可有之事、

附、市中巡邏之儀、尾州藩可相勤事、

一同斷夜戰之刻、印旗合詞丈ニテ紛敷儀ニ付、白之切レヲ以、左之肩ヨリ右之脇ニ結候樣之事、

一夜白共、出火之刻、其町寺院ニテ、早鐘合圖可有之ニ付、一藩ヨリ拾人内外駈付、取鎭可相成事、

内容見本

九月廿二日　板倉勝達家記

○十月二十三日ニ至リ、督府、勝尙ニ命シテ、東京ニ至リ謹愼セシム、參看スヘシ。

○諸路ノ官軍、若松城ヲ圍ムコト殆ト三旬、城中力竭ク、是ニ於テ松平容保、其臣手代木勝任、直右衛門、秋月胤永悌次郎等ヲ遣シ、米澤藩兵ニ因リテ降ヲ乞フ、是日、督府、容保及ヒ其子喜德若狹、ニ命シテ、二十二日ヲ以テ城ヲ致シ、親カラ軍門ニ詣リテ降禮ヲ執ラシム、因リテ勝任等ヲ放還シ、米澤藩兵ヲシテ之ヲ監送セシム。

○鎭將府日誌、中村利秋戰報ニ云、九月十六日夜、肥後父子降伏之使者秋月悌次郎、手代木直右衛門、小森一貫齋、軍門ヘ降伏歎願申出候ニ付、同廿日、右ノ者共御返シ相成。

○戊辰事情概旨ニ云、九月五日夜、會士萱野安之助、伊東左太夫、柴守三王屋總太郎、手代木直右衛門、秋月悌次郎等、陸續米城ニ來リ、急ヲ告ケ救ヲ乞フ、我藩ノ堀尾保助固拒之、徐ニ諭スニ順逆ヲ以シ、示スニ禍福ヲ以シ、之ニ歸降ヲ勸ム、且ツ微ニ市川宮内等、曩ニ參謀ニ聞處、降者ハ首惡ト雖トモ誅スルナク、或ハ如綫ノ血食ヲ存セン等ノ語ヲ諷ス、會士頗ル悟ル、八日、會士桃澤彦次郎、武田虎太郎相踵テ來ル、參政倉崎七左衛門及保助等應接セリ、會士益感悟シ、馳歸テ君臣ニ面諭シ、速ニ歸降センコトヲ約ス、因テ藩士青柳延之助、大竹直記、桃澤等ト共ニ會ニ入、期ヲ過キ食言スル勿ラシム、十日、會士辭シテ歸ル、後遂ニ降伏ニ至ル者、實ニ此時ニ胚胎セリ、時ニ官軍會城ヲ圍ム數重、晝夜砲戰休マス、會兵決死固守、數十日拔ク能ハス、是ニ於テ參謀村田勇右衛門、山本寺伊豫等ヲ召シ、謀テ曰、大ニ敢死ヲ募リ、潛ニ城中ニ入レ、歸降ヲ促シ、肯セスハ則火ヲ放テ内應ヲ爲サシメ、乘機四面一時ニ之ヲ攻擊セハ、以テ志ヲ得ヘシト、伊豫命ヲ奉シテ退キ、軍中ニ募リ、死士若干ヲ得、密ニ名簿ヲ參謀ニ呈ス、參謀大ニ喜フ、

内容見本

復古外記 稿本

蝦夷戰記 第一

自明治元年十月十九日
至同　　晦日

明治元年十月十九日、是ヨリ先、榎本武揚、和泉○舊幕府海軍副總裁、徳川氏ノ諸艦ヲ督シテ品川海ニ在リ、密ニ蝦夷地ニ據リテ、徳川氏ノ業ヲ復センコトヲ圖リ、松平正親太郎○舊幕府陸軍奉行等ト、船艦八隻ヲ奪フテ、仙臺海ニ走ル、伊達慶邦陸奥○仙臺藩主、ノ歸順スルニ及テ、平潟口總督府、慶邦ニ命シテ武揚等ヲ招降セシム、從ハス、松平定敬、越中○舊桑名藩主、板倉勝靜、伊賀○舊備中松山藩主、其子勝全、萬之助、小笠原長行、壹岐○唐津藩主長國ノ子、及ヒ竹中重固、丹後○舊幕府陸軍奉行、大鳥純彰圭介○舊幕府歩兵奉行、以下ノ諸敗兵、會津ヨリ來リ、仙臺、會津逋竄ノ徒ト、武揚等ノ艦ニ投ス、是ニ至リ、武揚等二千五百許人、開陽、回天、蟠龍、神速、長鯨、大江、鳳凰七艦ニ駕シテ蝦夷ニ向フ、報箱館府時ニ五稜郭ヲ以テ府廳ト爲ス、ニ達ス、時ニ箱館ノ守備府兵、及ヒ松前藩戍兵數百人ニ過キス、知事清水谷公考侍從、乃チ使ヲ弘前藩ニ遣シテ、援兵ヲ召ス、是日、弘前藩兵四小隊、至ル、公考命シテ谷地頭、及ヒ尻澤邊ヲ警守セシム。

○榎本釜次郎外五名口書ニ云、舊主徳川慶喜恭順之後、軍艦兵器等、盡ク御取上ニ相成候趣承知仕候ニ付、此上、主家之興廢如何可相成ト焦慮之餘リ、順逆ヲ不辨、蝦夷地ヘ割據仕、恢復可致所存ニテ、明治元辰年八月十九日夜、開陽、回天、蟠龍、

内容見本

○

元津輕陣屋迄、官軍相進候ニ付、重モニ五稜郭ヲ御打被成度、陸軍方ヨリ申來候間、乍早々、此段及御掛合候也。

五月十六日五字二十分

海軍　參　　謀

軍艦諸船將當蝦地追討記

○麥叢錄ニ云、五月十五日夜半、敵、軍ヲ潛メテ、我降參兵ヲ先ニシテ、千代ケ岡ヲ襲フ、元來、千代ケ岡ハ津輕家ノ陣屋ニシテ、要害堅固ニ戍之、中島三郎介原註、砲兵頭並、性剛直ニシテ、頑固タル老人ナルカ故ニ、死ヲ以テ守リシニヨリ、今敵兵ノ襲撃スルヲ見ルト雖トモ、更ニ動セス、盛ニ發砲、敵中ニ霰彈ヲ討込、多ク殪スト雖、渠降兵ヲ先ニシテ、四方ヨリ壁ヲ破リテ込入リ、血戰數刻、三郎介遂ニ丸ニ中リ斃ル、於是、其二子、恒太郎、房次郎ノ二名モ、敵中ニ入テ戰死ス、其他死傷數人有リ、又、元浦賀奉行組同心柴田伸助ト云老人有リ、三郎介ヘ附屬シテ此所ニ在シカ、終ニ一歩ヲ不退シテ死ス、殘兵敗走シテ五稜郭ニ入、原註、此敗兵内ニ澁澤誠一郎、其他快應ノ士數人有、千代ケ岡敗ルト聞、湯川ノ邊ヘ遁逃潛伏セシト、實ニ憎ムヘシ、十六日、齋藤辰吉出テ是ニ對ス、使ノ曰、今曉ハ幸ニシテ、千代ケ岡勝利ヲ得タリシニ付、直ニ五稜郭ニ迫ラント欲スレトモ、貴方ニハ敗後御混雜ナラント存、問合セノ爲メ來リシト云、答曰、御念ノ入タル御使、御苦勞ニ存ルナリ、御口上ノ趣ハ釜次郎ヘ申聞ル迄ニモナク、御都合次第何時ニテモ差支無之、決テ無遠慮御討掛ケ可然、乍併、往古ト違ヒ、方今ニ至テハ、天兵ヘ對シ、我々烏合ノ兵、日ヲ約シ刻ヲ期シ、整々堂々ノ軍致難カルヘシト云、使曰、實ニ然リト、又彈藥兵糧等ニ不足ナラハ送リ可申ト云、答曰、彈藥兵糧モ聊備アリ、御好意ノ段忝ク存レトモ、送リ賜ルニ不及ト云、使者諾シテ歸ル、此夕、辨天臺場一同恭順セシヲ聞、士卒各自ニ語リ、夜ニ入稍々脫走スル者アリ。

○史館記聞ニ云、中島三郎介ハ横濱ノ與力タリ、榎本武揚ノ蝦夷ニ赴ク、三郎介其二子恒太郎、房太郎ヲ挈テ之ニ從フ、已ニシテ其軍利ナキヲ見テ、季子ヲ横濱ニ返シテ曰、我家賤シト雖モ、世々幕府ノ祿ヲ食ム、當ニ死ヲ以テ之ニ報スヘシ、汝猶幼ナリ、宜ク其身ヲ保チ、以テ先祀ヲ奉スヘシ、且汝母依ルナシ、汝善ク之ニ事ヘヨ、房太郎涙ヲ洒テ別ル、已ニ家ニ歸ル、

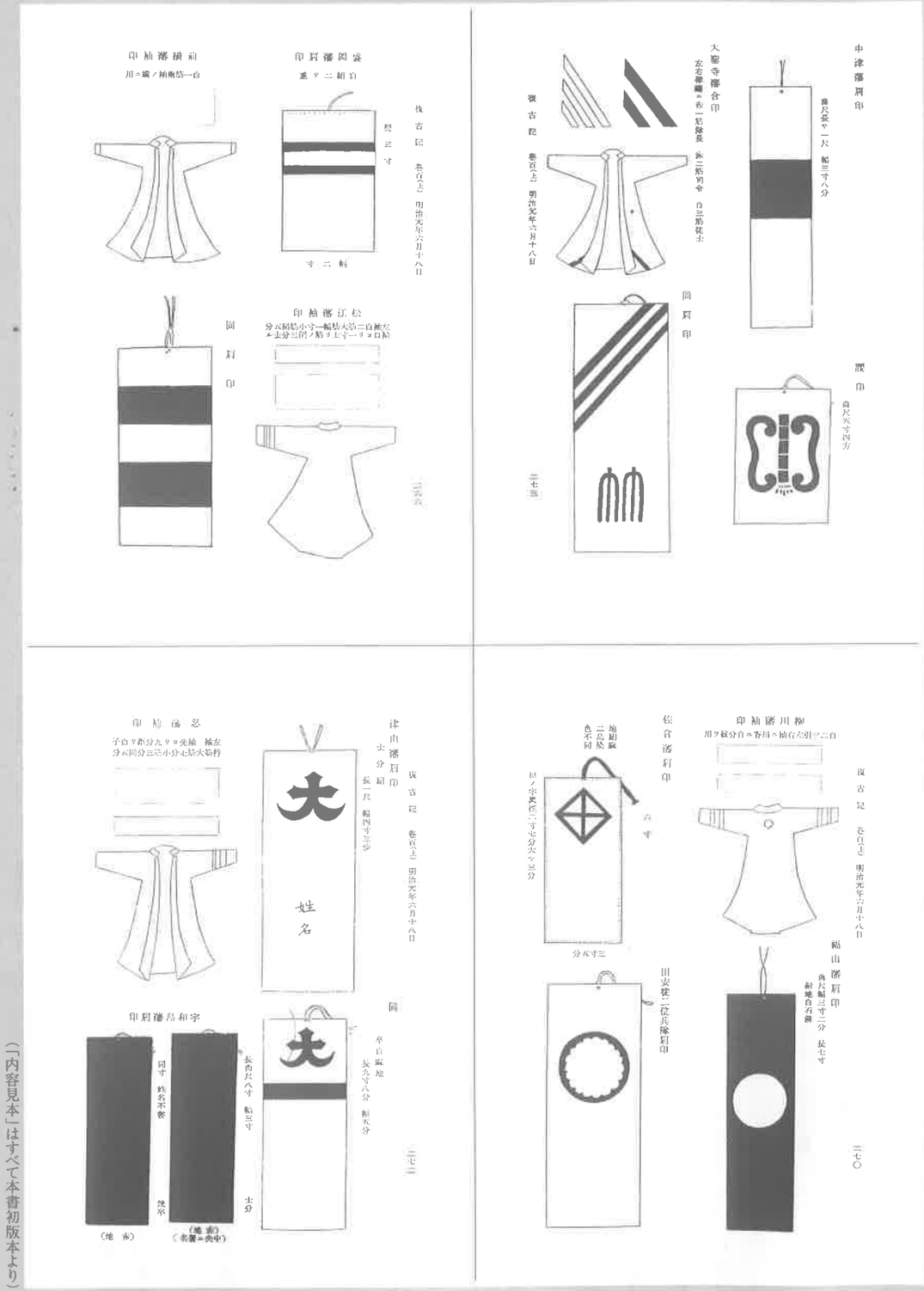
○左ニ記スル運上目録、訂盟各國ノ運上目録ニ照スニ、往々誤脱アリ、之ヲ外務省ニ質スニ、當時譯官ノ譯ヲ誤ルモノ多シ、然レトモ横文原書ハ訂盟各國ト同一ニシテ異ナルナシト答フ、因リテ一ニ原文ニ從ヒ、各條下ニ註明ス、但シ輸出品中材木税ハ、各國ト大ニ異ナリ、故ニ各國ノ材木税ヲ末ニ附ス。

運上目録輸出品、

第一種、

乾鮑	百斤ニ付一分銀三个	鮑貝	同同〇〇八	此銀一文目二分	樟腦	同同一个八	此銀十二文目
茯苓	同同〇七五	桂皮	同同〇三	此銀十一文目二分五厘	桂子	同同二个二五	此銀三文目七分五厘
石炭	同同〇〇四	繰綿	同同二个二五	此銀六分	棕櫚皮	同同〇四五	此銀六文目七分五厘
乾魚即鮭鱈鹽漬	同同〇七五	鰨	同同一个〇五	此銀十一文目二分五厘	五倍子	同同〇九	此銀十三文目五分
銀杏	同同〇四五	麻	同同二个	此銀六文目七分五厘	蜂蜜	同同一个〇五	此銀七分五厘
鹿角	同同〇九	煎海鼠	同同三个	此銀十三文目五分	錺日本產	同同〇六	此銀九文目
寒天	同同二个二五	鉛	同同〇九	此銀三文目七分五厘	茸類	同同五个	
魚油	同同〇三	菜種油	同同一个〇五	此銀四文目五分	書物用紙類	同同三个	
下品ノ紙但チリ紙漉返シ紙	同同一个	豆類	同同〇三	此銀四文目五分	牡丹皮	同同三个七五	此銀十一文目二分五厘
五升芋	同同〇一五	屑布	同同〇一二	此銀一文目八分	酒並燒酎類	同同〇九	此銀十三文目五分
板昆布	同同〇三	刻昆布	同同〇六	此銀九文目	菜種	同同〇四五	此銀六文目七分五厘
胡麻	同同〇九	鰹節	同同一个八	此銀十二文目	乾海老	同同一个八	此銀十二文目
生絲並ヨリ絲	同同七十五个	玉絲	同同二十个		熨斗絲	同同七个五	此銀七文目五分
眞綿	同同二十个	殼蛸	同同七个		蛸	同同十二个	

■以下、運上目録の品目は輸出６５、輸入１５０の記載あり。



■以下、９０頁にわたって３５０枚の図版あり。

（「内容見本」はすべて本書初版本より）

『復古記』復刊によせて

東京大学名誉教授
元東京大学史料編纂所長
宮地正人

幕末維新の変革が今日の我々までをも魅了しつづける理由は、当時三千万の日本人総てをまきこんだ国家的大変動だったとともに、一九世紀後半の世界資本主義に直面し包摂されていった日本人の、その巨大な圧力に対抗し、はね返す民族的力量そのものが、あらゆる側面と局面において厳しく試され、且つ鍛えられていった時期だったからでもあるだろう。

この変革の中でも、慶応三（一八六七）年一〇月の大政奉還より明治二（一八六九）年五月の箱館戦争終結までの期間は、国家体制の転換も含め最も激動し、最も多数の日本人が全国のすみずみから政治に参加した時期であった。安定した地位が永遠に続くと夢想していた旗本・御家人は、幕府「御瓦解」により瞬時にその知行と居宅を喪失した。朝廷に帰順し朝臣になろうとする旗本達は朝臣化運動に狂奔する。新政府に従い戊辰戦争に参戦する諸藩は、長州諸隊をモデルとし、藩内門閥制を打破しつつ、徹底した軍制政改革を並行して断行した。各地の豪農層は自装・自弁の草莽隊を自主的に結成し戦闘に参画する。他方、孝明天皇の信任は自らにあったことを確信する会津藩を核に、奥羽越の諸藩は、薩長二藩に擁されたとみなす新政府組織の追討軍に対し死力を尽して抗戦した。両軍の武器は最早旧式の火縄銃ではない。ミニエー銃・エンフィールド銃を始めとする各種新式の輸入ライフル銃であり、アームストロング砲となっている。そして権力の空白が発生するや各地に大規模な世直し一揆が勃発するのである。

この総過程を広汎な諸史料に基き明らかにした編纂書が「復古記」二六八巻である。「復古記」本

東京大学史料編纂所編
復古記　復刻版　全15巻

本書は，征夷大将軍徳川慶喜が政権奉還を奏請した慶応３年(1867)10月14日より，東征大総督有栖川熾仁親王がその任を解かれた明治元年(1868)10月28日に至る，いわゆる王政復古の編年史料であって，明治維新における権力移動，さらに明治２年の函館戦争終結まで続く国内戦の顛末を確実な史料をもって示す唯一の刊行史料である．本書は，長松幹を中心として16年８カ月を費やして，明治22年(1889)12月に完成し，昭和４－６年(1929-31)に刊行されたものの復刻版である．

内容紹介

①慶応３年(1867)10月14日－明治元年２月３日
②明治元年(1868)２月３日－明治元年３月18日
③明治元年(1868)３月29日－明治元年４月23日
④明治元年(1868)４月24日－明治元年閏４月25日
⑤明治元年(1868)閏４月26日－明治元年５月27日
⑥明治元年(1868)５月28日－明治元年７月17日
⑦明治元年(1868)７月19日－明治元年９月17日
⑧明治元年(1868)９月18日－明治元年10月28日［付録・奥羽越諸藩罰典］
⑨伏水口戦記　［明治元年(1868)正月3日－2月15日］
　東海道戦記１　［明治元年(1868)正月5日－閏4月23日］
⑩東海道戦記２　［明治元年(1868)閏4月24日－10月28日］
　房総戦記　［明治元年(1868)4月13日－4月25日］
⑪東叡山戦記　［明治元年(1868)5月13日－6月8日］
　東山道戦記　［明治元年(1868)正月9日－5月19日］
　北陸戦記１　［明治元年(1868)正月9日－5月2日］
⑫北陸戦記２　［明治元年(1868)5月3日－6月是月］
　奥羽戦記　［明治元年(1868)2月9日－11月18日］
⑬白河口戦記　［明治元年(1868)5月10日－10月29日］
　平潟口戦記　［明治元年(1868)6月10日－11月14日］
　越後口戦記１　［明治元年(1868)6月14日－8月3日］
⑭越後口戦記２　［明治元年(1868)8月3日－11月4日］
　蝦夷戦記　［明治元年(1868)10月19日－明治２年(1869)6月12日］
⑮綱文索引　［復古記綱文・復古外記綱文・復古記総索引］

（東京大学出版会「史料・復刻目録」より転載）

記（一五〇巻）では、慶応三年一〇月一四日徳川慶喜の大政奉還に始まり、同年一二月九日の王政復古クーデター、翌慶応四年正月征討大将軍仁和寺宮嘉彰親王のもとでの迅速な西国平定、二月からの東征大総督有栖川宮熾仁親王指揮下の旧幕府追討諸軍の東進と四月の江戸開城、他方で進展する新政府体制の構築、七月明治天皇即位と九月の東京行幸等々、外国公使の京都御所参内や諸外国との条約締結交渉、浦上キリシタンの処分問題などをも含め、国政レヴェルの大転換の一部始終が詳細に取りあげられている。本記の最終日は明治元（一八六八）年一〇月二八日、即ち会津降伏の事後処理が完了し、使命を果した東征大総督熾仁親王が、賜った錦旗と節刀を東京行在所の明治天皇に奉還した日となっている。と同時に、この日には、新国家（「御国体」）を支える地方体制が府・藩・県からなる「三治一致」体制だと規定する藩治職制が出された日だとの綱文をも立てている。大政奉還に始まる新国家形成の完了を府藩県三治一致体制発足の日に求めた編纂者の炯眼には舌を巻かざるをえない。「復古外記」（一四八巻）では、本記の中に入れると叙述が錯綜する鳥羽伏見戦争から榎本武揚軍の降伏に終わる箱館戦争迄を本記と別建てにし、一一の各「戦記」に分け、一つ一つの戦闘経過、草莽隊・「御親兵」を含む両軍の戦闘参加集団の構成、死傷者数等々を、極めて克明に諸史料を編纂しつつ叙述しているのである。

「復古記」全二九八巻が、昭和五（一九三〇）～六（一九三一）年にかけ内外書籍株式会社から全一五冊（内一冊は綱文集録と総索引）の浩瀚な活版印刷物となって出版されて以来、今日まで維新史研究者・地方史研究者・自治体史編集者を始めとする多くの関心ある人々の座右の書・必読文献として利用されてきたのには然るべき理由がある。明治六（一七八三）年の太政官正院歴史課以降、修史局・修史館・内閣臨時修史局・帝国大学臨時編年史編纂掛と、編纂部局を転々と移動しながら、一七年をかけて編纂された「復古記」は、当時太政官の力を以てしか集めることが不可能だった一二一二種に及ぶ諸史料を駆使して編纂されたからである。その基礎の一つは、全大名華族（奥羽越列藩同盟に参加した大名家も含む）から提出させた、大政奉還期から明治元年一〇月迄の「家記」と名づけられた各家・各藩の詳しい編纂記録である。と同時に「復古記」編纂のため、京都御所に保管されていた京都太政官時代の二万有余点の政府文書（「復古記」原史料）が、明治八（一八七五）年東京の修史局に廻送され、そこで内容別に整理された上で、「総裁局記」「内国事務局叢書」「弁事局叢書」「行政官叢書」等の名称で、「復古記」の随所に活用されているのである。僅かの従事者、財政の不如意さにも拘わらず、これだけの良質で厖大な諸史料を使用し、一七年という短期間で編纂を完了させたことは、史学史上の一偉業である。

とはいっても、「復古記」があまりに大部なためか、これまでは利用者の大多数は自分に必要な箇所のみを使用しているに過ぎない。読み込んでいけば、到る処でじっくりと考えるに足る記述につきあたる筈である。

第一冊慶応三年一二月二五日条の、江戸での薩邸焼打事件では、この事件を一二月三〇日、京都薩摩藩邸に最初に急報したのは、江戸詰重役大縄織江暗殺未遂事件をおこしたのち、薩邸にかくまわれ、焼打直前に薩摩藩士に邸外に脱出させられた秋田藩士激派の高瀬権平（平田延胤妹おすずの婿）と楠英三郎の二名だったことが記されている。江戸での薩摩藩と平田国学との関係に光が当てられるべきだろう。

同じく第一冊慶応四年正月二七日条では、備前藩・芸州藩両藩に宛てられた同日付の「今般王政御一新に付即今の処山陽道取調の儀」云々との新政府達に関し、同一文言の正月一四日の達には年貢半減の文言が載っているが、それはどうなったのか、との「復古記」編纂者の質問に対し、「池田章政家記」作成者は、「御取消相成候旨御口達有之候」と回答したと注記されている。半減令撤回は文書ではなく、問い合わせへの口頭での回答でのみおこなわれたことが、ここで明らかとなる。赤報隊の悲劇はおこるべくしておきてしまったのである。

第二冊三月四日条、参内途次の英国公使パークス襲撃犯人処刑では、北畠治房撰の襲撃犯三枝蓊（しげる）履歴が載せられている。それによれば三枝は伴林光平の弟子、藤本鉄石には南画を習っており、当然

文久三年八月の天誅組挙兵に参加した。だが、同月二五日の高取城攻撃に対しては、「ああ斯(かく)の如き無謀無算の行軍、奚(なん)ぞ勝算を得んや」と憤慨して脱隊、慶応三年の鷲尾隆聚の高野山挙兵には、岩倉具視の腹心香川敬三の勧誘により参加して輜重方副長の重責を勤め、この二月に「御親兵」に編入された人物なのである。彼の師伴林の参加した天誅組の行為を「無謀無算」と見抜いた三枝が、五年後パークス襲撃犯の一人になっていること自体が、新政府の「開国和親」政策への急転回が、それまでの国事活動家達に与えた衝撃の甚大さを問わず語りに物語っている。「時代遅れの攘夷家」とのレッテルを安易に貼りつけて事を済ますのではなく、この時点での権力当局者集団も含めた諸階級・諸集団のきちんとした政治的・思想的位置づけの必要性が痛感される。

例証は以上でとどめておこう。必要に迫られて関係箇所のみを調査するのではなく、分量に臆せず読み進めていくならば、我々の視野をひろげ、歴史と人間への理解を深めさせる史料と叙述に必ずや随所で逢著するだろう。それは一に、編纂諸史料の博捜さに起因しているのである。

とともに、二万有余点の「復古記」原史料が、所蔵する東京大学史料編纂所で目下整理・公開の途次にある以上、今日では一五冊の『復古記』自体が、膨大な量の原史料接近への索引的機能を果たすこととなる。関連する原史料を併せ調査・研究する中で、関心が寄せられている種々の課題の幅と深みが増していく可能性があるのである。

王政復古クーデターに端を発し、一年有半の戦争を経過し成立した維新政権とその相貌を一変させた全国の諸藩は、決して当初より廃藩置県を運命づけられた無意義な存在ではなかった。それは伝統を踏まえた在地的発展の一つの具体的なあらわれだったのであり、そこでの全国各地の活性化と種々の模索そのものが、逆に意想外の廃藩置県への権力衝動をも創出していったのである。

地域よりの視座、底辺より総体を把握する姿勢から再度明治初年史を考えようとする者にとって、まず必要となるのが、この『復古記』である。出版事情の困難な中、全一五冊にも及ぶ大部の復刊を決意したマツノ書店に心からの敬意を表しつつ、この一文を草する所以である。二〇〇六年一二月二七日

『復古記』は読者を待っている

作家　中村彰彦

日本史において「復古」といえば幕末の慶応三年（一八六七）十二月九日に渙発された王政復古の大号令を意味する。だから『復古記』といえば、王政復古を可能にした同年十月十四日の大政奉還にはじまり、戊辰戦争の終結に至る幕末維新史の全容を詳述した史書、という意味にほかならない。

その内容と意義については、佐々木克氏の簡潔な解説がある。

「原本は『復古記』百五十巻、『復古外記』百四十八巻。刊本は全十五冊、菊版、平均八七七頁、引用書千二百十二種。編年体綱文に続いて関連史料を収載、戊辰戦争研究のための最も重要な基礎史料である。明治五年（一八七二）十月、太政官正院に歴史課を設置し長松幹を主幹として編纂事業を開始、旧大名に対し、史料として、慶応三年（一八六七）十月以降戊辰戦争期の諸願書・履歴・達書・諸伺その他諸記録の編集・提出が命じられ、その後同課は太政官修史局・太政官修史館、内閣臨時修史局と改称されたが編纂は継続され、明治二十二年十二月に完成した。（略）官撰の史書であるから王政復古史観が基調となってはいるが、政府側朝敵側の史料ともに平均して収録しているのが特徴である。」（『国史大辞典』「ふっこき　復古記」の項）

傍点を付しておいた部分に、私もまったく同感である。

さて、右の引用文からも知れるように『復古記』は正編である「復古記」と副編というべき「復古外記」とから成っており、編年体で叙述される前者の刊本は第八冊まで、後者は第十四冊までで第十五冊は綱文と総索引に充てられている。

面白いのは、「復古記」と「復古外記」とがグラフにいうX軸とY軸の関係にあることだろう。たとえば「復古記」を追ってゆけば、ある藩が慶応四年十月以降、明治元年（一八六八）十月二十八日に東征大総督が解任されるまでの間にどのような動きを示したかを如実にたどることができる。

しかし、戊辰戦争は明治二年五月に榎本武揚および旧幕脱走軍がたてこもっていた箱館五稜郭の陥落におわるのであり、このような戊辰戦争の進展については時間順ではなく、地域別に把握する必要がある。そこで別途に編纂されたのが「復古外記」。その内容は以下の通りである。

第九冊は伏見戦記と東海道戦記①。第十冊は東海道戦記②と房総戦記。第十一冊は東叡山戦記と東山道戦記、北陸戦記①。第十二冊は北陸戦記②と奥羽戦記。第十三冊は白川口戦記、平潟口戦記、越後口戦記①。第十四冊は越後口戦記②と蝦夷戦記。

いわば「復古記」が日本史上最大の変革期の政治史であるのに対し、「復古外記」は戦史という観点からこの時代を総合的に俯瞰する。かくて『復古記』全体は、X軸とY軸とを併せ持った空前の編纂物として幕末維新史研究に寄与するところとなったのである。

特に第十五冊に収録された総索引がまことに丹念に作られているのは、編者たちが誇りにしてよいことであろう。

一、二例を挙げるとすれば、まず林忠崇（ただたか）（昌之助）の項が思い浮かぶ。林忠崇は上総請（じょうざい）西一万石の藩主であったが、家臣団とともに脱藩、箱根の関を占拠して一時は新政府軍の東下を遮断するなどした脱藩大名として知る人ぞ知る存在である。その林忠崇の索引は「老臣ノ入京」「領地没収」「箱根占拠」（以上「復古記」）その他三十一項目（「復古外記」）にも及んでいて、本文から当該ページを追ってゆくだけで、かれが戊辰戦史に刻んだ足跡をおおむね頭に入れることができる。

さらに「復古外記」第十四冊、蝦夷戦記に収録された諸報告を読むと、蝦夷脱走軍の守る松前城や箱館湾に艦砲射撃を加えた新政府海軍は、「廻転繰打（くりうち）」をおこない、昼になると沖に出て昼食休憩をとったことがわかる。この時代の艦砲はまだ舷側砲が主力だから、軍艦が陸地を砲撃するにはその陸地に右舷をむけたり左舷をむけたりと「廻転」しながら、順次舷側砲を発射してゆかねばならなかったのである。

話が私事に及んで恐縮だが、私は林忠崇については長編小説『遊撃隊始末』（文藝春秋、一九九三）と史伝『脱藩大名の戊辰戦争』（中公新書、二〇〇〇）を、箱館湾開戦に参加した新政府海軍旗艦甲鉄については『軍艦「甲鉄」始末』（新人物往来社、二〇〇六）を書いたことがある。その執筆中、私がつねに参照した史料こそ『復古記』全十五冊であった。

その第十五冊に収録された「復古記総索引」は三段組で三百三十五頁に及んでおり、これまでだれも研究対象としたことのない人名や出来事も多数記載されている。そのなかには『復古記』にしか記されずにおわった例も少なくないはずだから、その人物や出来事は、この総索引を手掛りとして、自分にアプローチしてくれる読者の登場を今も静かに待ちつづけているといってよい。

本書復刻版の刊行を機に、幕末維新史をより深く学ぼうとする人々があらわれることを期待せずにはいられない。

仮予約票へのコメントより

■このために支出をひかえていました。六月には出産するので、諸事にお金も時間も使いそうですが、『復古記』だけはあきらめることはできません。（埼玉・女性）

■壮挙・快挙・義挙、刊行を楽しみに心待ちしております。（岡山・男性）

■昔、神保町で一冊見つけて買った『復古記』。これを機会に全冊買って読みたいと購入を決意しました。（東京・男性）

■本当に最後の買い物になるかも知れないけれど、必ず購入するので、ぜひ、出版成就して下さい。（宮城・男性）

■ぜひとも購入いたしたく思っております。破格な価格に、書物とわが国の歴史を本当に愛おしいという気持ちが感じられます。（千葉・女性）

■雄図に感心し、感謝いたしております。ご成功を祈ります。（福島・男性）

■音にのみ聞く『復古記』とはいかなるものか、今から楽しみです。（大阪・男性）

■『復古記』を見たいなァと思っている時に復刻の報あり、読む能力を懸命に保存して、その日にそなえたいと思っております。（熊本・男性）

■『復古記』はまさしく「生涯の友」。手にとる日をいまから楽しみにしております。（富山・男性）

■この超特価！　他の古書店に浮気せず、待った甲斐が有りました。（奈良・男性）

■ついに、ついに、この時が！　ぜひとも、ぜひとも、買わさせて下さい！（埼玉・男性）

■幕末維新の変動が全国規模であることがよくわかる大史料集なのです。（東京・男性）

■私は農業のかたわらイラストレーターを仕事にしています。夢のような価格に我が目を疑いつつ心ははや「さて、本が届いたらどこに置こう、どんな資料が入っているの…、当時の生の空気をどんな形で読めるのやら…、あのナゾやこのナゾは解明出来るのか……」とワクワク。今から原稿料を『復古記』用に貯めておきます。（福島・女性）

■迷い、悩み、決めました。まさに「二度とないチャンス」に同感したからです。（埼玉・男性）

■遂に『復古記』の刊行、**日本では「維新」西欧では「革命」双方ともに、単に進歩的、新しい国家社会を目指すのみでなく、古き良き時代に戻るとの意が重く大きく含まれることが『復古記』なる名称に表われています。**（北海道・男性）

『復古記』との出会い

歴史作家　桐野作人

はじめて『復古記』を手にとってみたのは、もう十数年前になろうか。相楽総三と赤報隊に関心があって調べていた頃である。その頃は史料の所在や見方もよくわからずに、国会図書館などで気づいたものを手当たり次第にひもといていた。

『復古記』もそうして出会った一冊だった。じつをいうと、そのときの印象は決して芳しいものではなかった。

相楽らが処刑された場面は、正確にいえば、『復古記』の本記（第一～八冊）ではなく、別冊にあたる『復古外記』（『復古記』第十一冊）に収録されている。該当する慶応四年（一八六八）三月三日の綱文を掲げてみよう。

「是ヨリ先、相良（楽）武振ノ徒、先鋒嚮導（きょうどう）隊ト称シ、沿道諸藩ヲ脅迫シ、良民ヲ却（劫）掠ス、小諸、上田、岩村田、安中四藩、兵ヲ発シテ、其党数人ヲ捕斬ス、是日、督府武振等ヲ捕ヘテ之ヲ誅シ、其余党ヲ罰ス」

これを読んで、憤然とした覚えがある。まさに相楽らは「偽官軍」「無頼の徒」という扱いであり、草莽を排除して成立した官製の維新史観のありようをまざまざと見せつけられた思いがしたからである。そのためか、収録されている史料も冷静に読めなかったような記憶がある。

しかし、その後、多少は史料の見方がわかるようになってくると、当時の自分には見えていなかった部分が少しは見えるようになってきた。

相楽総三は昭和三年（一九二八）十一月に正五位を追贈され、六十年ぶりに名誉回復された。一方、『復古記』はその直後の同四年（一九二九）七月から同六年十月にかけて内外書籍から刊本が出版されている。名誉回復の直後ではあったが、その事実は当然ながら刊本には反映していない。反映させるだけの時間的猶予がなかったからである。『復古記』の編纂は明治五年（一八七二）から開始され、翌年に火災による焼失を経ながらも、編纂を再開して同十八年（一八八五）には本記、同二十二年（一八八九）には残りの外記の編纂が完了していた。刊本はこれを活字化したにすぎないのである。

ところで、『復古記』における相楽総三らの処刑の場面には、東山道総督府や信州沿道の大名家の史料が多数引用されているが、そのなかに『赤報記』から相楽の書簡五点も収録されているのは意外なことではないだろうか。宮地正人氏によれば、『復古記』は太政官政府所蔵の史料と諸大名家に提出させた「家記」類という、二つの基本史料群から主に構成されているという（『『復古記』原史料の基礎的研究」、『東京大学史料編纂所報』二六号、一九九一年）。

『赤報記』はそのどちらにも該当しないばかりか、おそらく赤報隊の生き残りの関係者の手に成り、相楽をはじめとする赤報隊士の雪冤を目的として叙述されもので、官製史書である『復古記』に収録されるには異色、異端の史料といわざるをえない。

なぜ「偽官軍」として断罪された相楽の書簡が収録されたのだろうか。担当編纂官の意図が奈辺にあったのか、まことに興味深い。とくに二月二十六日付の宛所不明の相楽書簡は東山道総督府に属する薩摩藩関係者に宛てたものと推定される。赤報隊の分遣隊が碓氷峠の手前で襲撃された追分戦争で、相楽は交戦した小諸藩などを「賊兵」と呼んでいること、分遣隊が江戸方面から東山道を上ってきた伯家こと白川家（堂上公家で白川神道の伯王家）の一子、千代麿を庇護・警固していたこと、薩摩藩士とおぼしき竹内健介が同道していたと思われること（赤報隊が薩摩藩の統制下にあった可能性）など、おのずと「偽官軍」説に反論する内容を含んでいる。

担当編纂官は、公式の維新史観に従って「偽官軍」とする綱文を立てざるをえなかったものの、両

論併記の立場から、相楽たちの言い分も盛り込むことで、その評価を後世に委ねたのかもしれないと推測することは的はずれだろうか。あるいは、担当編纂官にも非業の死を遂げた相楽たちに対する惻隠の情があったのではないのだろうか。ともかく、史官としての一片の良心が感じられるのである。

このことと関連するかどうかわからないが、信州高島藩士で平田国学の徒だった飯田武郷が明治十年（一八七七）から数年間、『復古記』の編纂主体である太政官修史館（修史局の後身組織）に御用掛として出仕している事実がある。飯田は赤報隊と同時期に編成されて東山道を進んだ草莽隊の高松隊（公家の高松実村を奉じ、甲府で「偽勅使」とされて解散）に所属していた。また相楽とも同志的な関係にあった。相楽書簡が『復古記』に収録された陰に、相楽と似たような経験をして生き残った飯田のひそやかな努力があったのではないかと推測してみたくもなる。

このように、『復古記』は官製史書という枠を超えて、一筋縄ではない懐の深さがあり、あだやおろそかにできない史料集であることに改めて気づかされたのである。

『復古記』は維新の過渡期における政治史であるとともに、戊辰戦争史の根本史料をなしている。とくに『復古外記』第九～十四冊は「伏見口戦記」（鳥羽伏見の戦い）から「蝦夷戦記」（箱館戦争）までを網羅した一大戦史である。決して薩長関係に偏らず、一部旧幕側の史料も含まれつつ、政府軍に参加した諸藩の史料が多数を占めており、明治政府側から見た網羅的な戊辰戦争史を構成しているのが大きな特徴である。また各戦記の末尾に、戦闘に参加した両軍の部隊数・総人員・死傷者数などが一覧表になっており、戦争の規模や悲惨な一面も伝えてくれる。

個人的な関心でいえば、まず上野戦争（彰義隊）を叙述した「東叡山戦記」がある。戦闘に参加した諸藩の報告書や記録が大量に収録されているのはもちろんだが、「寛永寺記」をはじめとする寺側の史料を駆使して、公現親王（輪王寺宮）の動向を詳しく記しているのが興味深い。また箱館戦争の「蝦夷戦記」は陸海で展開された戦闘の過程を立体的に叙述しており、刻一刻と変化する戦況が眼前に現れてくるようだ。この迫真性は『復古記』ならではの醍醐味である。

『復古記』に収録された史料は優に二万点を超すという。大政奉還から箱館戦争終結までの一年半ほどの歴史を語るには充実しすぎているほどである。この濃密な史料と向き合っていると、時折、史料のほうから語りかけてくる瞬間があるような気がするから不思議である。

今回、マツノ書店が『復古記』という、幕末維新史の未踏の最高峰に挑戦し、ついに登頂を成し遂げたことに敬意を表するとともに、より多くの人にその喜びが分かち合えたらと念じている。

復古記と三条実美

東京大学史料編纂所　箱石　大

明治十四（一八八一）年、大蔵省印刷局のお雇い外国人キョッソーネは、太政大臣三条実美の肖像銅版画を制作し、一般にも販売された。肖像画に描かれた三条は、自身の右側にあるテーブルの上に置かれた一冊の本に右手を載せている。本の背表紙には少し指がかかってはいるものの、「復古記」と書かれていることが読み取れる。実際の「復古記」は非常に大部なものであり、肖像画中の「復古記」はあくまでも三条の業績を表現するための象徴的な小道具に過ぎない。明治二年九月、戊辰・箱館両戦役の軍功行賞に引き続き、復古功臣に対する論功行賞が行なわれ、三条はその筆頭として岩倉具視と並び詔書をもって賞典禄を下賜されていた。キョッソーネによる肖像画制作当時、太政官修史館によって編纂されていた「復古記」は、復古功臣第一であった三条の事績を飾るに相応しいものと認識されていたのであろう。ところが皮肉なことに、三条の肖像銅版画が完成したこの年の十二月、「復古記」編纂事業は中止の危機を迎える。このとき当初から編纂主幹であった修史館監事の長松幹は、修史館総裁を兼任していた三条太政大臣に編纂継続を請う意見書を提出し、何とか編纂事業は再開・継続されるに至った。「復古記」と三条をめぐる興味深いエピソードである。

座右に置きたい「読む」年表

萩市特別学芸員　一坂　太郎

私が『復古記』揃いを東京の古書店目録で見つけ、購入したのは十数年前、二十代の半ばだった。昭和四年（一九二九）から六年にかけ、内外書籍から出た最初の版である。恥ずかしながら、実物を手にするまで『復古記』にかんする知識はほとんど無かった。原口清『戊辰戦争』など、特に戊辰戦争関係の著作に引用、紹介されるのを目にする機会が多かったから、官製の詳細な戦記くらいに考えていた。

それでも注文したのは、学生時代、毎日のように通った神保町古書街の店頭でも、一度しかお目にかかったことがない稀覯本だったからである。この機を逃せば、次はいつ出会えるか分からない。そのころ、生活を切り詰めてでもとにかく基本史料を書棚に揃えたいと意気込んでいたので、迷わず十八万（だったと思う）払って手に入れた。

ところが数日後届いた重厚な『復古記』十五冊をひととおり見た（読んだのではない）私は、あまりにも予想と違う内容だったので途方に暮れた。中身はまず綱文が立てられ、次にその根拠となる史料が小さな活字で引用されるという繰り返しだ。『維新史』や『防長回天史』のような「読む」歴史書を期待していただけに、肩透かしを食らった気がした。とても使いこなせる代物ではないと、その時は思った。

ところが所々拾い読みしてゆくと、意外と面白い史料集であると考え直すようになった。綱文だけをどんどん読み進め、興味が沸く記事に出会えば史料に目を通せばよい。歴史好きなら、絶対に面白い文献である。政治史が中心だが、経済、文化にいたるまで激動の一年間が立体的に迫ってくる。中には各藩の印鑑や兵士の袖印や肩印を図版で集めた頁もあり、見ていて飽きない。以来「読む」年表と考えるようになった。

たとえば戊辰戦争にかんする記事が並ぶ間に、「（明治元年六月）六日、是ヨリ先、永平寺、総持寺、長ヲ争ヒテ相争フ、是ニ至リ、永平寺本宗タルヲ以テ、総持寺輪番住持ノ制ヲ廃シ、硯徳ヲ選ミテ、住持ト為シ、永平寺ニ昇住セシメ、永平寺ニ命シテ、宗規ヲ更生セシム」といった綱文が突然現れる。そして十頁以上にもわたり、この問題にかんする史料が収められている。旧勢力と新勢力が拮抗し、漁夫の利を狙う欧米列強が凝視する最中にも、僧侶たちは醜い権力争いを繰り返していたのだから苦笑させられる。

あるいは以前、明治元年三月十五日付、伊藤俊介（博文）書簡を入手した時のこと。兵庫県出身の私にとり、初代兵庫県知事となる伊藤が、神戸時代に書いた点が何よりも重要だった。内容は親征、行幸、海軍などに及んでおり、私は意見書の類いと考えて一見の後仕舞いこんでいた。

ところがこれを見た友人が、新政府から発令された何らかの文章ではないかと言う。そこで気になり『復古記』の頁を繰ったところ、なんのことはない。第二の八六七頁に「今般王政御一新万機従　朝廷被　仰出候ニ付テハ」に始まる、同じ文章が出ているではないか。天皇が大阪に行幸する前に出された布告だったのだ。それを在神戸の伊藤が書き写して関係者に回覧させたのが、その文書だったのである。最初から『復古記』を見ればよかったと、その時思ったものだ。

『復古記』のような大部の史料は、図書館で関係頁をコピーすれば足ると考えるむきもあるだろうが、それは違う。座右に置き、目的もなくぱらぱらと頁をめくる時にこそ、研究テーマのヒントが見つかるのだと思う。あるいはそれが、生涯を通じて取り組むテーマになるかも知れない。特に将来のある若い研究者やファンに、お薦めする所以である。

『復古記』の今日的意義

紀田順一郎

『復古記』は維新期を知る一等史料だが、その編纂作業には紆余曲折があった。すでにその価値は決まっているものの、近代日本大出版事業史の系列に置いてみることにより、一層大きな意味を発見できよう。

まず本書が一八七二年（明治五）の太政官職制改正に伴って新設された「内史」所管の七局の一つ、歴史課の事業であったことに注目したい。同じ七課の中には地誌課も設けられ、明治政府が維新後数年という早期に修史および地誌の編纂を意図したことが知られる。このような動きは政府だけにとどまらなかったのはいうまでもない。明治初期の開成所英学教授柳川春三の建白、すなわち第一に国史を撰ぶべき事、第二に風土記を撰ぶべき事、第三に日本辞書を撰ぶべき事という意見は、当時一定の知見を有する人々の共通の願望だった。維新の大事業を成し遂げたり、波に乗ったりという、近代国家を形作る者としての高揚感が、基礎的な文化事業の必要性を感じさせた。その意味では、同時代における国家の意思であったといってよい。

しかし、国家的背景だけで大出版が可能になった例は一つもない。地誌に関しては官庁組織ではまったく目途がつかず、吉田東伍という民間学者の超人的努力の産物『大日本地名辞書』をまたなくてはならず、国語辞書についても所管の文部省が投げ出したものを、担当官大槻文彦による私家版『言海』として、辛くも実現するほかはなかった。修史事業についても、当初は同じ轍を踏みかねないところだった。歴史課の主要事業となって数年を経ても埒が明かず、九年後に職制の改廃により中止の危機にまで追い込まれたのを、課長だった長松幹の意見書により、ようやく継続の方向性を見出すことができたのである。

長松幹は周防国生まれの長州藩士である。京都に遊学、久坂玄瑞らと公家間に出入りし、国事に尽瘁した。一八六四年（元治元）藩の右筆となったのを皮切りに儒役雇から雇医員となる。長州征伐のさい大願寺書院で調停役の勝海舟と会見した長州藩士五名のうちの一人が、長松幹である。その後藩の編輯局に勤めて尊王事蹟を編集、明治政権のもとで函館軍功取調掛、太政官正院歴史課長、修史局長などを経て、修史館監事となった。後年元老院議官となり、一八九一年（明治二四）貴族院議員に勅撰されたが、一九〇三年（明治三六）六月一四日没した。享年七十歳。遺著に『秋琴山房文鈔』『秋琴遺響』がある。

このように見ると生涯は順風満帆のようだが、修史の仕事はストレスの連続だった。太政官修史局は江戸時代の藩政史、王政復古の経緯に加え、維新後の地方行政の沿革をも一つにまとめるという大きな構想をもっていたことが知られている。この方針にもとずいて、同局は一八七四年（明治七）各府県に地域史料の作成を指示、同度までの地方史刊行の暁には、年度版の地方史を出すという計画を立てたのである。

文部省が国語辞書プロジェクトを投げ出したのは、識者の混合集団を統一する個性の欠如、官製の複雑化による求心力の低下などにも原因があったが、何よりも財政逼迫による予算削減が大きかった。このため大槻の個人作業となり、原稿完成の後も出版は棚上げの状態となった。

不況期に文化事業予算がカットされるのは、日本の悪弊である。長松の場合も悪戦苦闘の連続だった。早稲田大学図書館には「修史館歳費増額申請書」が保存されているが、それにはすでに修史事業に全く関心を失った政府に対し、長松が綿綿と予算の増額措置を訴える姿が見られる。結局政府は事業持続の意志を放棄、東京大学に移管し、辛うじて『復古記』として完成させた。一八八九年（明二二）末のことで、前後十六年八ヶ月もかかっている。大槻文彦の場合にそっくりといえよう。

スタンリー・アンウィンの言にまつまでもなく「出版は私性である」（『出版概論』）洋の東西を問わず、いかに巨大な背景があっても、推進力となる個人の営為と情熱が不在では出版は成立しない。明治の大出版『復古記』もその例外ではないということは、出版が未曾有の状況に直面する現在、私たちに無限の示唆を与えているといわなければなるまい。

『復古記』について

『復古記』は卒論でお世話になって以来垂涎の書で、同好の仲間内でも「戊辰戦争を調べる時に手に取る本」の筆頭です。

日録と史料集の利点を併せ持つ『復古記』の利便性は、何と言っても、抄録ながら各史料の内容を確認できること。載録史料には未刊本も多く、膨大な記録の中から偏りなく選択されていて、思わぬ史料との出会が少なくありません。また奥羽戦争のように攻守が多数で複雑な場合でも、ある日の戦闘に従軍した藩や布陣などを複数の史料から読み取り、全体像を把握することが可能です。

ただ各戦記が鎮撫軍の派遣地別に編まれているため、個別史料を複数の戦記間で横断的に利用するのはやや面倒かもしれません。その場合は索引巻や、東大史料編纂所がネット公開するデータベースでの綱文(出来事)検索も併せて利用されることをお勧め致します。

私自身は数年前に古書店で古書を購入しましたが、今回の復刻に、待てば良かったと思うこと頻りです。

(東久留米市　西澤朱実)

(前略)いよいよ『復古記』なのですね。すばらしいことです。

中学生で戊辰戦争と出会った私は、少しずつ史料を集めながら、「いつかは『復古記』」とずっと思っておりました。

実際に入手できたのは、それからかなりたって、結婚して間もない頃でした。たまさか夫と出かけた神田の古書店の奥に、それはありました。

新婚家庭にはきびしい額でしたが、夫は少しも動じず「買いなさい」とだけ言ったのでした。

『復古記』は、項目のたて方、原史料の選択、配列のしかたに独特のものがあります。索引がついているとはいえ、目的の史料にたどりつくのは容易ではありません。

しかしその情報量は圧倒的で「やはり『復古記』」といわざるをえません。

今日も付箋紙を手に『復古記』のページをめくっている次第です。

ついでに一言。山形・秋田の戊辰戦争をメジャーにしたい私としては、後藤宙外著『秋田戊辰勤王史談』の復刻をぜひお願いします。

(天童市　石山順子)

「復古記」といえば、王政復古の正史として編纂され太政官により刊行されたもの。

発行は政府ですが、実際仕事を行ってきたのは、東京(帝国)大学史料編纂所でした。

正史とか国家史とかと言ってしまうと、戦前の日本の歴史を否定するムードの中で育ってきた現代人は、いらがっぽさを感じるかもしれません。しかし「復古記」は、慶応三年の大政奉還から明治元年東征大総督解任まで、及び、戊辰戦争の十一の戦記について、編年体で、当事者たちの記録、つまり一次史料を収録していった、超硬派の史料集です。

たとえば下野の戊辰戦争。東山道総督府の交換文書、総督府日記のほか、宇都宮藩主「戸田忠友家譜」など各藩の記録や日誌、個人の従軍日記や家記が、新政府側・旧幕側双方収録されています。浅田惟季の「北戦日誌」など、実際に戦闘の場にあった当事者達の記録も豊富。立場に捕らわれず、色々と客観的に比較対照できます。

私が、小説や評論などで散々戦下手と評されてきた大鳥圭介について、洋式戦術を駆使した優秀な指揮官であったと見直す気になったのは、本書収録されていた浅田惟季の筆が最初でした。

現代人が現代語で加工を重ねて書き連ねた姿とはまったく違った、ありのままの歴史世界があるのだと気づいたものです。

国史の修史事業として刊行されたものを民間が引き継いで覆刻するのは、歴史分野における官学民のパートナーシップの一つの代表かもしれません。それが大出版社ではなく、いわば地方の古本屋さんが請け負われることによるのですから、それを実現させた背後の並々ならぬご苦労と果断には、畏敬の念すら覚えました。(東京都・入潮)

(ブログ「山と蟻の間」より、本書紹介文を転載)

『復古記』に踏み切った理由

マツノ書店　松村久

私はここ数年間『会津戊辰戦史』『仙台戊辰史』『七年史』など、これまで長く待たれていた戊辰戦争関係書を順次復刻し、そのなりゆきで「次は、この『復古記』を待たれているのでは」と予想していました。

やがて同業者の市会で本書を見つけて購入。座右に置いているうちに古本屋の勘で、本書は質量共に最も充実した、文字通りかけがえのない根本史料集だと思うようになったのです。

明治初年国策の一環として発足し、途中から東京帝国大学が受け継いで完成させた、本書への各界最高の先生方の思い入れも大きく、これも本書を撰ぶことになった大きな理由です。

そうはいってもこの時代、全十五巻もある揃物の販売に本気で取り組むには、かなりの勇気と決断が要ります。

すでに活字市場は狭まっていくばかり、先では復刻事業そのものさえ成り立たなくなるかも知れません。

しかし今なら、自分がこれまで培った直販の技術を駆使して、誠心誠意の価格で勝負すれば何とかなると思いました。こんなに分厚く高額な本を販売しようとするアホは、日本中に自分しかいないと思ったのです。

万一よく売れなくても、内容抜群の史料本は古本屋の宝。価格次第では、いつか完売します。

またもし大幅赤字になっても、今なら挽回する気力体力ともに自信あり。つまり自分にとっても、今回は『復古記』を復刻する最後のチャンスかもしれないのです。

申し上げるまでもなく、東京大学出版会・東京大学史料編纂所の後押しも大変な力になりました。この欄を借りて厚く御礼申し上げます。

以上、今回はお客様からのコメントが異常に少なく、空欄を借りて、急ぎ勝手なことを書かせて頂きました。

(逆に「仮予約票」へのコメントは多く、すでに編集完了後なので七頁目に押し込ませて頂きました)

古本屋・復古記復刻・奮闘記

マツノ書店　松村 久

お粗末ながら、『復古記』販売の内幕を一席。

年間八万点を超える新刊が発行される出版物過剰時代、気になるのは、需要に応じた復刊・復刻ができないことです。

また戦後教育の悪弊により、史料を原文で読める世代は年々減少し、復刻事業はますます困難になり、今や大部な史料集は絶望的です。

そのため、たとえば戊辰戦争の解明に最も必要とされる本書の古書価は、保存の良い物なら二十万円以上もします。

これでは手が出ません。またもし復刻されても、この全集・揃物が毛嫌いされているとき、だれが、どこに、どうやって販売するのでしょうか？

幸い小社は、三十年間磨きに磨いた「本の産直」で全国数多くのすぐれた維新史研究者、愛書家をお得意様としており、同時に出版界最大の桎梏「再販制」のしがらみにとらわれない、超零細ならではのユニークな道を歩んでおります。

本書の版権は東京大学にあり、折衝の結果、史料編纂所の了解も得ることができました。そしてこのほど出版会が復刊する本書二百五十セットすべてを小社が買い取り、勝手に販売できるという破格の取り決めをおこなったのです。

さて、これから最低二百セットは売らねばなりません。そのためには、一体いくらで売れば良いのでしょう？

以前から私は「本書の買いやすい価格は十万円」と思っていました。田舎の貸本、古本屋から維新史料復刻へと、業界の周辺をさまよってきた五十余年の勘であります。

しかし東京大学出版会の定価は、十五万七千五百円に決まりました。これでは十万円は無理です。

でもそこは、冗費を極限まで省くことで成り立つ一人出版の強みです。十一万円でも三割引となり、値引額の四万七千五百円は、奇しくも書店経由の流通経費そのものです。不肖私の本書普及への思い入れは、この価格に凝縮しております。

気になるのは、本書が大部なこともあってこれまで一度しか復刻されておらず、内容を知る人が非常に少ないことです。

『復古記』はよくある無味乾燥な官製の史書とは違います。そこには人間が生きており、切れば血の出る明治維新の現場から当事者達が発した生の言葉の集大成ともいえましょう。

したがって本書販売のポイントは、その辺をいかにお伝えできるかにかかっており、パンフも大部のものになりました。ぜひ、しっかりお読み頂きたいと思います。

そして本書が「顧客・東大・小社共、三方笑いの三両得」、また「読めば末代丸もうけ」になることを願って止みません。

それでは早めにご注文のほど、心からお待ち申し上げております。

火車日誌　復古記特集

一月〇日　『復古記』覚書の件で何度目かの東大詣で。

本書全十五巻の束見本が、もう出来ていた。刊行までまだ半年もあるのに……。さすが「日本一の牧製本」だけある。

ズラリと並んだ束見本は、風格から開き易さまで、全く言うことなく大安心。これを見ただけでも来て良かった。

山口県出身で今は多摩市在住の女性イラストレーター、大須賀ケイさんと神保町の珈琲舎・蔵にて打ち合わせ。以前から彼女の作品をほほえましく思っていたが、『復古記』を機にイラストを依頼。

古書店を回る。なぜかこれまで『復古記』を見たことは一度も無い。同じ大冊でも、かつて小社で復刻した『吉田松陰全集』や『木戸孝允文書』など、見たくもないほど並んでいたのに……。

一月×日　ほかの仕事をそっちのけにして、毎日『復古記』のパンフづくりに明け暮れ……。

それにしても、他社の復刊する本をそのまま全部買い取り、定価よりはるかに安く販売するとは、何とも酔狂なこと。

一月〇日　「東京大学名誉教授」「前国立歴史民俗博物館長」「元東京大学史料編纂所長」という三冠王は宮地正人氏である。推薦文には最初の一つしか書いてなく、今ひとつおねだりする。

一月×日　運良く昭和四年『復古記』初版時のパンフを入手。A5判二十四頁の堂々としたものだが、中の「推薦文」については、いま作っているパンフの方がはるかに良く、何とも有難いこと。

本書の版元・内外書籍株式会社は、塙保己一編『群書類従』、物集高見著『広文庫』『群書索引』の版元としても知られた硬派の出版社であり『復古記』の版面は、戦前の活字印刷黄金時代を偲ばせる、落ち着いた美しいものである。

二月〇日　『復古記』復刻についての「コメント」募集を始めて一ヶ月。まだ一通も来ない。

これまで扱った大物『木戸孝允文書』『大久保利通文書』はいずれも戦後二度復刻されていたのに、この『復古記』は一度だけで、持っている人が少ないせいか。

あるいは本当は待たれていないのか？　いやそんなはずはない。

しかし内容がいくら良くても、売値との兼ね合いもある。これは予想ほど売れないかも……？

二月×日　紀田順一郎氏の推薦文によると、驚いたことに『復古記』主幹として活躍した長松幹は、何と長州藩士。あのころ政財界以外では珍しく、これは嬉しい。

二月〇日　いまどき全集・揃物の復刻は珍しいが、広告によると、戦後ある時期話題になった雑誌『サークル村』の復刻版は、千九百頁で六万四千円也。『復古記』の頁数に換算すると四十五万円。復刻専門業の価格はこんなもの。

二月×日　初の試み、イラスト入「仮予約ハガキ」出来。二千三百通を発送。ここまで来たらもう、後は野となれ、山となれ！

二月〇日　「仮予約ハガキ」で紹介したインターネットの筆者判明。男性とばかり思っていたら、これまた女性。（本紙十四頁参照）

二月×日　一月の「コメント募集」への反応はゼロだったのに、ハガキ一枚のPRによる「仮予約」は初日から賑わい、一週間で百を超えた。これは何とかいけるか？

二月〇日　「仮予約」は初の試みなので、どうなるのか見当もつかないが、でも、もし二百を超えたらどうしよう……。

■本書初版の刊行後、別冊としてA5判六二頁、約四千箇所に及ぶ「正誤表」が配布されています。

これだけの誤植を発見するのは大変でしょうが、買ったあと自分の本を一々修正するのも、また面倒です。

でもご安心下さい。今回復刊される東京大学出版会の復刻版ではそれらの誤植をすべて修正してあります。

見た目は天金背革特装の豪華な初版が圧倒的ですが、実質的には復刻版の方がはるかに良いわけです。

■いつもながら「一括払い」も「分割払い」も同額で申しわけございません。

お陰様で小社の「分割払い」、ひいては事業そのものが成り立っていると、いつも心から深く感謝しております。

■今後一年間は「東軍関係史料」の復刻は致しません。どうぞご安心願います。

■体　裁　A5判上製箱入
全十五巻　総計約一万三千頁
■定　価　十五万七千五百円（税込）
■特　価　先着二百名様に限り十一万円（税・〒込）
■発　売　平成十九年五月中旬予定
▼書店不卸　▼分割払可　▼返本OK
〒745-0032
周南市銀座2～13
☎〇八三四㊗二一九五
URL http://www.matuno.com
E-mail info@matuno.com
マツノ書店